

# スリランカ政治史における ラージャパクサー族政治

荒井 悦代

## 本書の目的

スリランカは、1983年より2009年まで分離独立を求める少数派のタミル人による組織・タミルイーラム解放の虎 (Liberation Tigers of Tamil Eelam: LTTE) と政府が内戦状態にあった。その内戦を終結させた時の大統領が、本書の主たる分析対象となるマヒンダ・ラージャパクサ (Mahinda Rajapaksa) である。マヒンダは大統領の権限を強化しただけでなく、兄弟や取り巻きを優遇した。とくにマヒンダと2人の弟ゴタバヤ・ラージャパクサ (Gotabaya Rajapaksa)、バジル<sup>1)</sup>・ラージャパクサ (Basil Rajapaksa) の3人による政策決定の独占はトロイカ体制と呼ばれた (*The Sunday Times* 2007)。本書では重要な政策決定にかかわるこれら3人を中心とするラージャパクサ兄弟の子息・血縁者やその配偶者などをラージャパクサー族とする<sup>2)</sup>。ラージャパクサー族政治においては政権の意思決定権が実質的に一族のメンバーにあり、権威主義的な体制が強化され、民主主義は崩壊寸前といわれた (Bastians 2014)。

2015年にラージャパクサの一族支配打倒を旗印に市民社会や野党だけでなく与党も含む複数の政党が協力しマヒンダの大統領三選を阻止した。しかし、わずか5年後には弟のゴタバヤが大統領選挙に出馬し、大統領選挙では最多の票を獲得して当選した。そのゴタバヤは、2022年7月に大規模かつ長期にわたった反政府運動(ア

1) バシルと表記されることもある。

2) 2人のほかに意思決定には深く関与していない兄弟や従兄、姻族の大臣や議員もいた。

ラガラヤ：シンハラ語で闘争を意味する)の結果、大統領を辞任せざるを得なかった。

荒井(2016)では、盤石とされたマヒンダ体制のほころび、マイトリパーラ・シリセーナ(Maithripala Sirisena)とラニル・ウィクレマシンハ(Ranil Wickremasinghe)によるヤハパーラナ(シンハラ語でグッド・ガバナンスを意味する)政権が成立するまでの経緯について解説した。

本書は、前掲書がとりあげなかったが、一族政治の成り立ちを理解する鍵となる過去の政治動向にも配慮する。また政治と司法の関係、政治とナショナリズムの関係、村の政治意識、財政政策、対中関係などの事例について掘り下げ、極端な一族政治がいかに現れ、そして消えたのか、再びラージャパクサー族が復活する可能性はあるのか、を理解する手がかりを提示しようとするものである。

## 1 スリランカ政治の概況

ラージャパクサー族の政治を分析する前に独立以降のスリランカ政治の流れを簡単に示す。

### 1-1 独立以降～強い大統領制導入

「世界最大の民主主義」を自負する隣国インドの男女普通選挙が1950年に導入されたのに対して、スリランカの民主主義の始まりは古く、1931年には男女普通選挙が導入され、選挙による政権交代を継続してきた。1948年の独立以降、議院内閣制をとっていたが、1978年に大統領制を導入した。表0-1に独立以降の、首相と大統領の変遷を示す。任期途中の死去や引退によって生じた変更も含まれていること、大統領選挙と国会選挙が行われるたびに変更が反映されることなどもあって若干わかりにくいのが、独立から1978年まではスリランカの二大政党である統一国民党(United National Party: UNP)とスリランカ自由党(Sri Lanka Freedom Party: SLFP)が選挙のたびに政権交代を繰り返してきたことがわかる<sup>3)</sup>。UNPは西欧寄

3) 例外のひとつは1960年3月に成立したダドリー・セーナナーヤカ政権である。ダドリー政権は連立政党が分裂したため就任後間もない7月に選挙を行わざるを得ず、その選挙に敗北した。その結果順序よく交代しているようにみえるが、実質的にはSLFPが56年から65まで政権にあった。

表0-1 独立以降の首相および大統領

年	月	日	選挙の種類など	首相	大統領
1947	8-9	8/23-9/20	第1次国会	DS.セーナナーヤカ	
1952	5	25-30	第2次国会	ダドリー・セーナナーヤカ	
1956	4	5-10	第3次国会	S.W.R.D.バンダーラナーヤカ	
1960	3	10	第4次国会	ダドリー・セーナナーヤカ	
1960	7	20	第5次国会	シリマヴォ・バンダーラナーヤカ	
1965	3	22	第6次国会	ダドリー・セーナナーヤカ	
1970	5	27	第7次国会	シリマヴォ・バンダーラナーヤカ	
1977	7	21	第8次国会	J.R.ジャヤワルダナ	
1982	10	20	大統領選挙	ラナシンハ・プレマダーサ	J.R.ジャヤワルダナ
1988	12	19	大統領選挙	D.B.ウィジェトンガ	ラナシンハ・プレマダーサ
1989	2	15	第9次国会	D.B.ウィジェトンガ	ラナシンハ・プレマダーサ
1994	8	16	第10次国会	チャンドリカ・クマラトウンガ	D.B.ウィジェトンガ
1994	11	9	大統領選挙	シリマヴォ・バンダーラナーヤカ	チャンドリカ・クマラトウンガ
1999	12	21	大統領選挙	ラトナシリ・ウィクレマナーヤカ	チャンドリカ・クマラトウンガ
2000	10	10	第11次国会	ラトナシリ・ウィクレマナーヤカ	チャンドリカ・クマラトウンガ
2001	12	5	第12次国会	ラニル・ウィクレマシンハ	チャンドリカ・クマラトウンガ
2004	4	2	第13次国会	マヒンダ・ラージャパクサ	チャンドリカ・クマラトウンガ
2005	11	17	大統領選挙	ラトナシリ・ウィクレマナーヤカ	マヒンダ・ラージャパクサ
2010	1	26	大統領選挙	D.M. ジャヤラトネ	マヒンダ・ラージャパクサ
2010	4	8-20	第14次国会	D.M. ジャヤラトネ	マヒンダ・ラージャパクサ
2015	1	8	大統領選挙	ラニル・ウィクレマシンハ	マイトリパーラ・シリセーナ
2015	8	17	第15次国会	ラニル・ウィクレマシンハ	マイトリパーラ・シリセーナ
2019	11	16	大統領選挙	マヒンダ・ラージャパクサ	ゴタバヤ・ラージャパクサ
2020	8	5	第16次国会	マヒンダ・ラージャパクサ	ゴタバヤ・ラージャパクサ

(注) 緑はUNP(統一国民党)、青はSLFP(スリランカ自由党)あるいはそれらを中心とする政党連合。

(出所) <https://www.parliament.lk/daters-of-elections>等より筆者作成。

りの自由経済、SLFPは社会主義的な経済を志向していたため政権交代のたびに経済政策が変化するなどの不安定要素があったものの、党の指導者は植民地時代から続く、貴族的な家族や大規模な土地所有者家族の出身者でイギリス時代に英語教育を受けた、裕福なエリートが率いている点は共通していた。外交政策は非同盟を軸としていたため、国際政治の変動の影響を受けることが少なかった。つまりスリランカは独立以降、比較的安定した状態にあった。

## 1-2 ジャヤワルダナ政権期（1978～1989年）

政治面および経済面で現在につながる変化がはじまったのは1970年代後半である。国会選挙でUNPが議席の6分の5（168議席中141議席）を獲得し、党首のJ・R・ジャヤワルダナ（Junius Richard Jayewardene）はその後のスリランカに大きな変化をもたらす2つのことを行った。ひとつは経済自由化、もうひとつは憲法改正により大統領制を導入し、権力を大統領に集中させたことである。この制度変更によって国会は内閣が提出した法案や予算を承認するだけの単なるゴム印となった（Ivan 2020）、と評される。経済自由化を効果的に行うために大統領制を導入し、トップダウンの意思決を行うことが必要とされたという（de Silva 1994）。ジャヤワルダナは新憲法を制定以降、退任するまでの10年間に、15回もの憲法改正を行った。とくに大統領就任から数年間に行われた改正は権力基盤の強化が目的であった。たとえば、第4次改正（1982年）では、第8次国会の会期を1989年8月4日（6年間）まで延長した（第1章も参照）。

ジャヤワルダナ大統領在任中の出来事としては、1983年にLTTEとの内戦がはじまったこと、内戦をめぐり1987年にインドとインド・スリランカ和平協定を締結し、それに基づき第13次憲法改正を行い、地方への権限移譲を目的として州評議会（Provincial Council: PC）制度を導入したことも挙げられる。

## 1-3 プレマダーサ大統領政権期（1989～1993年）

ジャヤワルダナの後に大統領に就任したのは、1989年の大統領選挙で当選したUNPのラナシンハ・プレマダーサ（Ranasinghe Premadasa）であった。1982年ですでに独立以降の「選挙のたびに政権交代」というパターンは崩れていたところに、さらに独立以来のスリランカ政治との大きな違いが生じた。それはプレマダーサ

の出自はいわゆるエリートではなかったということである。従来のエリートはゴイガマという上位カーストに属していたのに対してプレマダーサは最下層に近い洗濯屋カーストであった。プレマダーサの選挙民に対するアプローチは、直接民衆に語りかけるもので、従前の政治指導者とは異なったものの<sup>4)</sup>、プレマダーサはジャヤワルダナと同様に大統領として強権的な意思決定を好んだ。経済政策もジャヤワルダナを引き継いだ。

#### 1-4 クマーラトゥンガ大統領政権期（1994～2005年）

UNPのジャヤワルダナとプレマダーサが大統領だった10年以上の間、二大政党のひとつSLFPは政権を脅かすような強い野党ではなかった。党の指導者であったシリマヴォ・バンダーラナーヤカ（Sirimavo Bandaranaike, SLFPの創設者S・W・R・D・バンダーラナーヤカの妻）の公民権がはく奪されていたこと、国会の議席数が小さかったことがその理由である。さらに党内で継承者をめぐって対立しており、党年次大会も開催されていない有様であった。結果的にシリマヴォの娘のチャンドリカ・クマーラトゥンガ（Chandrika Kumaratunga）が党を率いることになり、1993年5月の州評議会選挙に勝利したのを皮切りに西部州首相に就任、1994年8月の国会選挙に勝利し、首相に就任した。さらに同年11月には大統領選挙に出馬し当選するなどまさに旋風を巻き起こした。クマーラトゥンガは、経済面ではUNPの自由経済を受け継いだ。経済自由化を継続すると決めた時点で、二大政党の大きな違いはなくなった。クマーラトゥンガは、大統領として2期を務め、ノルウェーや日本などから支援を受け、交渉による内戦の政治的解決を試みたものの、軍事的解決を主張する勢力の反発を強く受けた。内政面では、憲法を改正し大統領制度を廃止しようとしたが、これも難航し大統領の権限をわずかに縮減するにとどまった<sup>5)</sup>。

クマーラトゥンガの大統領任期途中に行われた2001年の国会議員選挙でUNPが多数派を占めた結果、国会と大統領の間にねじれが生じた。大統領は、国会を解

4) 中村尚司 1993.『1992年のスリランカ——軍事解決と和平交渉の二重の困難』『アジア動向年報1993』アジア経済研究所, 515.

5) 第17次憲法改正（2001年10月）で憲法評議会と行政委員会（公務員委員会、選挙委員会、国家警察委員会）等を設置することにより大統領以外の意思決定の場を設けた。

散できる2004年を待ち、国会を解散し、ねじれを解消したが、残された任期の短さやクマラトunga支持の低下およびインドネシア・スマトラ島沖地震によるインド洋津波への対処もあり、内戦を解決することはできなかった。

### 1-5 マヒンダ大統領政権期（2005～2015年）

2005年11月の大統領選挙は、UNPからは党首のラニル・ウィクレマシンハ、SLFPからはマヒンダ・ラージャパクサが出馬した。ラニルは、内戦の停戦交渉に積極的であったので、武装闘争によって独立を達成しようとするLTTEや海外在住のタミル人・ディアスポラとは異なり、終わりのみえない内戦に疲弊していた国内に居住するタミル人たちは、ラニルに投票するのではないかと推測されていた。ところがこの時、LTTEは北部のタミル人らに投票を控えるよう命令した。結果は、マヒンダが488万票、ラニルが470万票という僅差（18万786票）でマヒンダが当選した。タミル人が投票に行き、ラニルに投票していたら結果は異なっていたかもしれない。

大統領就任後マヒンダは2006年7月に紛争の軍事的解決に舵を切り、2009年5月にLTTEを殲滅した。26年間誰もなし得なかった終戦を実現したことから英雄の名声を得た。マヒンダは圧倒的な人気を背景に2010年1月に前倒しで大統領選挙を行い、601万票を得て内戦終結時に軍司令官だったもう1人の英雄サラット・フォンセーカ（Sarath Fonseka）（417万票獲得）を相手に圧勝した。

マヒンダが大統領在任中、内戦が終結し、経済活動も活況をみせはじめた。しかし、政権をめぐるネガティブな面は就任直後からみえはじめていた。SLFPの選挙オーガナイザーとして2005年の大統領選挙を統括したマンガラ・サマラウィーラ（Mangala Samaraweera）がSLFPからUNPにクロスオーバー（党籍替え）する際の2007年の書簡（*The Sunday Times* 2007）やフォンセーカの大統領選挙演説に具体例が示された。たとえば第18次憲法改正（2010年）により大統領の三選禁止を廃止し、長期政権を可能にした。同改正では、警察や司法などの高位公職者人事にかかわる憲法評議会の権限を縮減し、代わりに大統領の人事における裁量が増大した。第13次憲法改正以来スリランカでは分権化を進めることになっていたが、これとは逆に中央集権化が進んだ。政権批判を行う人々への人権侵害、表現の自由の抑圧も多発した。対外関係においてはそれまで重視されていたインドとの関係が悪

化し中国との関係が深まった。対中関係の深化はスリランカのインフラ開発に寄与したが、プロジェクトの手續きが不透明であることやプロジェクトの経済合理性に疑問が投げかけられた（荒井 2016）。

## 1-6 シリセーナ大統領・ラニル首相（ヤハパーラナ）政権期（2015～2019年）

政権内部での足場を固めたマヒンダであったが2014年9月の州評議会選挙の結果を懸念し、前倒しで2015年に大統領選挙を実施することにした。最大野党のUNPは、与党SLFP内の反マヒンダ勢力をとりこみ、市民社会の活動家らの支援を得てマヒンダの三選阻止に成功した。大統領立候補者のシリセーナは620万票を得たのに対して、マヒンダは570万票しか得られなかった。二大政党が協力して新政権を樹立したことは、スリランカの政治史において画期的な出来事であった。

2015年8月の国会議員選挙でマヒンダは、シリセーナ率いる（もともとマヒンダが所属していた）SLFPから出馬した。マヒンダは当選し、SLFP内部は、現大統領のシリセーナと前大統領のマヒンダを支持するグループ<sup>6)</sup>に分裂した。2016年、マヒンダの弟のバジル・ラージャパクサがマヒンダの本格的な政界復帰準備のためにスリランカ大衆党（Sri Lanka Podujana Peramuna: SLPP）を創設した。

シリセーナ大統領とラニル首相の間にはすぐに亀裂が生じた。2018年10月にシリセーナ大統領が突如ラニル首相を解任し、かつての政敵マヒンダを首相に任命した。最高裁判所がシリセーナ大統領の行為を違憲と判断し、ラニルが首相に戻ったものの、大統領と首相の間の亀裂は元に戻らなかった。2019年4月に発生したイスラム過激派によるイースター・テロ<sup>7)</sup>は、シリセーナ大統領とラニル首相の連携が良好であったならば防ぐことができたと思われている。あるいはヤハパーラナ政権を不安定化させようとする、イスラム過激派以外の勢力も加わった動きだったともいわれている。

6) SLFPにありながらシリセーナに反対するJoint Opposition (JO) と名乗った。

7) キリスト教会や高級ホテルなどが爆弾テロの対象となり、270人余りが死亡した。

## 1-7 ゴタバヤ大統領政権期（2019～2022年）

シリセーナの任期満了にともない2019年11月に行われた大統領選挙は、マヒンダの弟で軍出身のゴタバヤ・ラージャパクサとサジット・プレマダーサ (Sajith Premadasa) の一騎打ちとなった。サジットは第3代大統領ラナシンハ・プレマダーサの息子である。イースター・テロに見舞われたスリランカの国民は、軍出身のゴタバヤのような強いリーダーシップを望んだ。ゴタバヤの得票は690万票で、これまで行われた大統領選挙のなかで最多であった。大統領就任後、ゴタバヤは軍出身者の強みをみせて2020年、新型コロナウイルス感染症の流行に対して厳格な外出禁止などの規制を実施した。2020年8月の国会議員選挙では、マヒンダが党首を務めるSLPPが多数を占め、マヒンダは首相に就任し2015年に政治の中枢から退出したラージャパクサー族が復活した。

しかし、ゴタバヤ政権がコロナ対策として外出制限など厳格な規制を1年半にわたり継続したことは、経済活動や国民の生活を圧迫した。またゴタバヤの大統領就任からしばらくして唐突に化学肥料の使用を禁止し有機肥料に転換するよう命じたのも混乱に拍車をかけた。

2021年末から2022年にかけて、深刻な外貨危機による燃料・電力不足が発生し政治的な混乱のきっかけとなった。2022年3月末より一般市民がゴタバヤ大統領の辞任を求めてゴールフェイス・グリーン<sup>8)</sup>に連日集まった。活動は一過性のものではなく、運動の中心地はゴタ・ゴー・ガマ (ゴタ (ゴタバヤ)), 出て行け村) と命名された。この運動はシンハラ語で「闘争」を意味するアラガラヤと呼ばれた。アラガラヤに明確な指導者は不在であったが、人々はゴールフェイス・グリーンに3カ月余りとどまり「(政治の) システム・チェンジ」を求め、結果として2022年5月には首相のマヒンダ、6月には財務大臣のバジル、そして7月には大統領のゴタバヤを辞任に追い込んだ。スリランカの民主主義を崩壊寸前といわれる状態にしたラージャパクサの一族政治は、指導者のいない、一般市民による運動によって崩壊した。

---

8) コロンボの中心地・旧国会議事堂付近にあり、インド洋を望む広場。



## 1-8 ラニル・ウィクレマシンハ大統領政権期（2022～2024年）

マヒンダの後任にはラニル・ウィクレマシンハが首相に任命された。ゴタバヤの辞任後、ラニルは大統領代行を務めたが、国会議員による選挙が行われ、ラニルが正式に大統領に就任した<sup>9)</sup>。ラニルは翌日ディネーシュ・グナワルダナ(Dinesh Gunawardena)を首相に任命した。

## 2 ラージャパクサー族政治の特徴

### 2-1 一般的な一族政治との差異

南アジアにおいて政治家一族内で、父から息子あるいは娘、夫から妻に権力を引き継ぐことはよくみられることであった。たとえばインドのネルー・ガンディー一族、パキスタンのブット一族、バングラデシュのハシナー族などが挙げられる。権力継承のタイミングは、父親や夫の死後・あるいは引退後が一般的である。

南アジア以外に目を転じると、父親などが10年以上の長期間政権にあり、独裁に近い体制をつくりあげ、民主的な選挙も行われていない例が散見される<sup>10)</sup>。これらの場合も、権力継承のタイミングは先代の死後（引退後）であろう。

ところがラージャパクサー族は、世襲あるいは家族の政権への参入のタイミングが異なる。マヒンダが大統領に就任した当初から同世代の兄弟が政権の有力ポストを同時に占めた。さらに子ども世代も同時期に国会議員や大臣ポストを得ている。

そして、大統領在任中に権威主義化を進め、人権侵害や表現の自由を迫害したことは共通しているが、スリランカでは選挙が行われていたことは他の顕著な一族支配が横行した国と異なる。ラージャパクサー族は2015年に大統領選挙の敗北を受け入れて混乱なく下野している点も特徴的である。

9) ラニルの大統領としての任期終了は、任期途中で辞任したゴタバヤの本来の任期までで、2024年9月に大統領選挙が行われ、ラニルは落選した。

10) たとえばジンバブエのムガベは1987～2017年まで大統領を務め、一族は莫大な資産を蓄財したとされる。シリアではハーフィズ・アル＝アサドが1971年から2000年まで大統領を務め、その後息子が権力を継承した。

## 2-2 過去のスリランカ政権との比較

過去のスリランカの政治史をみてもラージャパクサー族はそれまでの政治家たちと異なる。二大政党のひとつUNPのセーナナーヤカー族は父のD・S・セーナナーヤカ (Don. Stephen Senanayaka) と息子のダドリー (Dudley Senanayaka) が首相をついたが、後を継ぐ者はなかった。大統領制を導入したJ・R・ジャヤワルダナは息子がいたものの、政治家にはならなかった。マヒンダ自身は男子6人女子3人の9人兄弟で、彼には息子が3人いて、政治に興味を示す後継者が複数いることも強みである。

もうひとつの二大政党SLFPのバンダーラナーヤカー族は子ども世代の世襲のタイミングはラージャパクサー族に近いといえる。SLFP創設メンバーの一人であるS・W・R・D・バンダーラナーヤカが1959年に仏僧に暗殺された後に、南アジアの政治によくあるように妻シリマヴォがSLFP党首となり、首相となった (1960～65年, 1970～77年, 1994～2000年)。シリマヴォは、甥のF・D・バンダーラナーヤカ<sup>11)</sup>や側近らに支えられた。その後娘 (チャンドリカ・クマラトゥンガ) が大統領になった (1994年11月)。その際に母親のシリマヴォが首相に就任した。娘が大統領で母親が首相というペアであり、ゴタバヤ大統領とマヒンダ首相のペアと似ているように見える。当時、SLFP党内では首相は年長者が任命されるという、明文化されていない合意が党内にあった。シリマヴォは78才と高齢であったことから、首相任命は、党内から少なからず批判を受けたものの大きな反発を引き起こすことはなかった。母娘というより政治経験の少ないクマラトゥンガを補佐する経験豊富なエリート政治家というペアとみなされたからである。

首相だけでなく国会議長についても、2000年10月から1年ほどと短い期間ではあるがクマラトゥンガ大統領の任期中に弟のアヌラ (Anura Bandaranike) が務めている。アヌラは全会一致で国会議長に選出された。

アヌラは、クマラトゥンガ大統領政権下で外務大臣も務めたが (2005年8月～11月)、その後重要ポストにはつくことはなくバンダーラナーヤカー族の政治の表舞台での活躍はここで終わる<sup>12)</sup>。アヌラは、マヒンダ大統領によってマンガラ・

---

11) 1960～1965年のS・W・R・D・バンダーラナーヤカー政権下では財務大臣、首相補佐、国防大臣、外務大臣を務め、1970～1977年のシリマヴォ政権下では法務大臣を務めた。

サマラヴィーラらとともに2007年にSLFPから放逐され、2008年に死亡した。クマーラトゥンガの娘や息子は政治から距離をおいている。

このように、スリランカでは大統領と首相、あるいは大統領と国会議長を同一の一族が占めた例がある。ところがマヒンダが兄弟を要職につけた時、そしてゴタバヤが大統領として政権にあった期間、同一政権において大統領、首相、主要閣僚・副大臣などに就任した時、大きな批判を受けた。以下で詳しくみるように単に要職を一族・兄弟で占めたからではなく、意思決定を一族で独占していたからである。

### 2-3 ラージャパクサー族政治の特徴

ラージャパクサー族の一族政治はいつはじまったのか。マヒンダは2009年に26年続いた内戦を終結させたことから、とくに国民の約75%を構成する多数派のシンハラ人から絶大な支持を得た。しかし一族支配は内戦終結をきっかけとしたものではない。それ以前、2005年11月の大統領就任当初からはじまっていた。

マヒンダ大統領政権期（2005～2015年）にはマヒンダの兄弟、兄弟の子ども、マヒンダの妻の親戚などが要職に任命された。軍を退役した後アメリカ在住だった弟のゴタバヤは国防次官、もう1人の弟のバジルは大統領上級顧問（2005～2010年）に就任し2007年<sup>12)</sup>国会議員となった。バジルは2010年の国会議員選挙ではガンパハ県から立候補し当選した。兄のチャマル（Chamal Rajapaksa）は1989年にハンバントタ県から国会議員に選出され、港湾・南部開発大臣（閣僚）灌漑・水管理大臣（閣僚）ポストのほか2010年より2015年まで国会議長を務めた。マヒンダの息子のナーマル（Namal Rajapaksa）は2010年にハンバントタ県から国会議員に選出された。マヒンダからすると甥に当たる、チャマルの息子シャシンドラ（Shasheendra Rajapaksa）は2009～2015年までウヴァ州の州首相を務めた。マヒンダのいとこのニルパマ（Nirupama Rajapaksa）は国会議員で、水供給大臣を務めた。このほか政治だけでなく国有企業や民間企業での重要ポジションにつく者もいた。

12) クマーラトゥンガは、大統領としての任期を終えた後は、国会議員ではないがSLFPの顧問として影響力を及ぼすこともあった。たとえば2015年の大統領選挙では、シリセーナを応援するため政治活動を活性化させた。

13) Ameer Ismail議員の死去にともない生じた空席を補充する形で国会議員に就任。

このようにマヒンダが一族のメンバーを要職につけた理由は、信頼できるブレインが周囲にいなかったからといわれている。大統領就任前、マヒンダはクマーラトゥンガ大統領の2期目（2004年4月～2005年11月）において首相を務めていたものの、内戦の交渉などの当時の重要課題に関与しておらず、党内に信頼できるブレインも不在だった。そのためアメリカに居住し、アメリカの市民権をもっていた2人の弟を呼び寄せバジルを大統領顧問に、ゴタバヤを国防次官など重要ポストにつけた。従来重要ポストを得ていたシニア議員は閑職に追いやられ、将来有望とされる中堅議員も党から排除され、重要な意思決定が兄弟で行われた。この一族以外の排除と一族内での意思決定独占が、同じように重要ポストに一族を任命したバンダーラナーヤカー一族との違いであり、批判の源泉である。

ゴタバヤ期（2019～2022年）も一族の任用は続いた。ゴタバヤ・ラージャパクサ大統領は国防大臣・テクノロジー大臣などを兼任し、マヒンダ・ラージャパクサ首相は仏教振興・宗教・文化大臣、都市開発・住宅大臣、環境大臣、経済政策・計画実施大臣（いずれも閣僚）を兼任した。バジルは2021年にはナショナル・リスト選出の国会議員として復活し<sup>14)</sup>、財務大臣となった。ナーマルは2020～2022年まで青年・スポーツ大臣やデジタルテクノロジー・企業開発国務大臣、開発調整・監視大臣（閣僚）を務めた。

軍出身のゴタバヤの人事の特徴は、一族だけでなく軍関係者を大量にとりこんだことである。マヒンダ期にも領事などに軍関係者が任命された例はあった。Sachini Perera（発表年不明）の資料によれば、カマル・グナラトナ（Kamal Gunaratne）を筆頭に軍関係者を各種省庁のさまざまな部署に任命した長いリストが形成されている。国防省だけでなく、外務・港湾・災害・開発・復興・交易・保健・民間航空・経済・安全保障・農業・考古学を担当する省庁など分野を問わない（Abeygoonasekera 2023, 79）。

ゴタバヤは兄のマヒンダを首相に任命すると公約に掲げ、実際にそうした。これまで歴代の大統領は、目立たない・影響力のない無害なシニアを首相に据えるか、まったく逆に次の大統領候補を据えるかであった。クマーラトゥンガ大統領が2期目にマヒンダを首相に指名したのがこれに当たる。ゴタバヤの大統領就任時、

---

14) SLPP のジャヤンタ・ケタゴダ氏がバジルに議席を譲るために国会議員を辞任した。

党内にはほかにもマヒンダと同年代で経験を積んだ政治家はいた。それらを差し置いてマヒンダを首相候補としたのは、内戦終結の功労者としての功績やマヒンダのカリスマ性を期待したものであろう。有権者からみても政治家としてのキャリアのないゴタバヤが兄のマヒンダから助言を得ることができると好意的にとらえられた。しかしマヒンダには前政権でのネガティブな面もあった。有力な大臣だけでなく首相までも一族から任命したことで、極端な一族支配の復活という側面を必要以上に際立たせることになった。

たとえ一族が要職を占めていても、彼らが選挙で選ばれたり、正当な手続きを経ている、あるいは役職が経験や能力にみあっているのなら問題ない。少なくともゴタバヤ大統領のマヒンダ首相任命は、正当な手続きを経ている。

しかし、他の多くの事例はそうではなかった。政治任用であるため十分な知識がない、汚職や不正・不透明な経営判断が横行し後の経済危機の深刻度が増した。外交官の任用も、経歴や資質が足りないことが問題となることがあった。汚職で逮捕されたものもいる<sup>15)</sup>。

以上みたように、ラージャパクサー族政治は、一族や取り巻き優遇や汚職・不正が深刻化し、2015年の大統領選挙および国会議員選挙で敗れた。にもかかわらず2019年の大統領選挙および2020年の国会議員選挙で復活した。つまり数年をおいて行われた大統領選挙で国民はゴタバヤに投票した。ゴタバヤには現職不利というアドバンテージがあったが、キャンペーン中からマヒンダを首相に任命すると述べており、一族による政権が復活することは容易に予想できた。それでも有権者は国の政治をラージャパクサー族に任せる判断をしたのである。

大統領選挙に次ぐ2020年の国会議員選挙で145議席を得て勝利したのはSLPPであるが、SLPPは2016年にマヒンダを復活させるべくバジルが創設した政党であり、ここに投票することは、マヒンダをはじめとするラージャパクサー族の復活を支持することにほかならない。再びラージャパクサー支配がはじまるかと思われた。しかし2022年、外貨危機がもたらした長期にわたる停電や極端な燃料・ガス不足が国民の広い層に不自由と不足を強いた結果、これまでにない大規模な抗議活動

---

15) ラージャパクサー族の親戚でもあるロシア大使のUdayanga Weeratunga (2006～2015年)は、スリランカ軍が2006年にウクライナから中古のMiG-27航空機4機を購入した際のレポートとマネーロンダリングの容疑でスリランカ刑事捜査局の職員によって逮捕された。

が発生し、一族は退陣に追い込まれた。

スリランカの有権者はなぜ2015年に一度拒否したラージャパクサー族を2019年に再び政権につけたのか。シリセーナ大統領とラニル首相のヤハパーラナ政権の機能不全に幻滅した有権者に対し、ゴタバヤは2019年の大統領選挙キャンペーンにおいて、マヒンダを首相にすると明言しており、内戦終結の功績と多様な政治経験をもつマヒンダと軍出身のゴタバヤというペアに、スリランカ国民がカリスマ的な英雄と治安回復を公約に掲げる強いリーダーシップを求めたとされる(The Hindu 2022)。

## 3 本書の構成

第1, 2節でみたようにラージャパクサー族は、選挙で選ばれ内戦を終結させた英雄としてカリスマ視され、国民の支持を得て比較的短い間に一族政治を確立し、権力を強めることに成功した。

ラージャパクサー族が政権の中核にとどまり続けるため、あるいは中核に復帰するために政権基盤を強化するさまざまな手法が用いられた。本書は次のような観点からラージャパクサー族政治成立および崩壊の要因を探る。

### 3-1 選挙と国会運営

第1章では選挙と国会運営の観点から分析する。マヒンダは、「選挙で選出された正当な政権」であることを根拠に国民だけでなく国際社会の批判をかわせると考えた。選挙に勝利するために彼らは何を行ったのか。

ラージャパクサー族は、内戦を終わらせた功績を背景に権限を拡大したが、その手法はジャヤワルダナが憲法改正によって政権基盤を強化し、国会において一次的に安定的な議席数を確保しようとするものとは異なっている。ラージャパクサー政権は、制度そのものを永続的に変更しようとする大胆な変革を行った。一族が、どのようにして国会議員たちの支持を得ようとしたのか、またそれを保つために行った内政面での工夫を検討する。

### 3-2 憲法改正および司法制度

第2章では、スリランカの憲法を分析することによって、一族支配がいかに強まったか、または弱められたかを分析する。ラージャパクサーらは国会で多数派となり、憲法改正や人事によって大統領が関与できるスペースを広げた。

憲法改正において最も重視されたのは憲法評議会（Constitutional Council: CC）であった。CCの機能や実態について検証することで、今後のスリランカ政治において司法が果たすべき役割を提示できるかもしれない。

### 3-3 シンハラ・ナショナリストとラージャパクサー族

第3章では、ラージャパクサー族の支持層となったシンハラ・ナショナリストについて分析を行った。ラージャパクサー族が内戦を終わらせた功績の他に、自らの強みと自覚し、彼らの行動の規範となる方針があるとすれば、それは多数派のシンハラ・ナショナリスト的な思想に寄りそう姿勢である。

スリランカにおいてシンハラ・ナショナリスト的な思想やその政治的利用は新しい現象ではない。とくに2000年代より二大政党は小規模政党と連立せざるを得なくなったことも影響している。では、ラージャパクサー政権を支持したシンハラ・ナショナリストは何が特徴的だったのか。

### 3-4 村の政治意識の変化

総論と第1章で述べたようにラージャパクサー族、とくにマヒンダはシンハラ農民の出自であることを強調する。それは村に居住するシンハラ人の数が多く、シンハラ人の支持を得ることが選挙における勝利に必須だったからである。UNPはかつて補助金を削減したり、経済的な恩恵を実感させられずに、村の支持が得られずに政権を失った。すなわち村においては生活と政治が強く結びついていた。

では、今日村人は選挙の際に何を根拠に投票しているのか。村人は物価に対する関心が非常に強く、何がいくらか、どれくらい上がったかなどを細かく記憶している。厳しいやりくりをするため自然に覚えてしまっているのだろう。結果として、村人は物価に結びつく経済政策・補助金などにかなり関心が高い。第4章ではコロナ禍と経済危機というこれまでにない苦境を経たスリランカの村で人々は政治に対してどのような認識をもつようになったのかという問いについて論じる。

### 3-5 ラージャパクサー族支配下の財政の特徴

ゴタバヤ大統領がアラガラヤで失墜する直接の引き金となったのは極端な物不足であり、その根本原因は外貨不足、つまり対外債務の返済が困難になったからである。スリランカのこれまでの政権の多くは財政赤字の削減目標を達成できずにいた。そのため、ラージャパクサ政権のみに責任を問うことは不適切だろう。しかし、2023年11月14日にスリランカ最高裁判所がゴタバヤ元大統領、マヒンダ元首相、バジル元財務大臣、アジット・カブラール元中銀総裁には経済政策を誤った責任があるとの判決を下した<sup>16)</sup>ことから彼らの経済運営およびその背後にある慣行に何らかの問題があったといえるだろう。第5章では一族支配下におけるスリランカの財政政策の特徴を検証する。

### 3-6 国際関係——中国偏重の弊害——

独立以降しばらくの間はUNPが親西欧、SLFPは国内志向という色分けがあった。にもかかわらず外交政策としては非同盟諸国という枠組みに守られ、超大国の対立に巻き込まれなかったという点は幸運であった（Gunatileke, Tiruchelvam and Coomaraswamy 1983, 166）。

ところが内戦中および内戦後より、中国の資金を用いて、人目を惹く新規大規模プロジェクトが次々と実施された。これらはスリランカ国民に、内戦中の停滞から脱却してダイナミックに開発が進展していることを実感させたし、実質的な雇用を一時的にせよ創出した。

ラージャパクサー族に権限が集中したことで、中国がスリランカの意思決定に入り込むことが容易になり（Abeyagoonasekera 2023, 56）、スリランカの政治・経済に甚大な影響を及ぼすようになった。その意味で一族政治と中国の相性はよかった。しかし、その後の政権がとったアプローチは中国を困惑させた。第6章では政権交代ごとに目まぐるしく変化する対中関係を追う。

---

16) 罰金や賠償金については言及なし。このほか元中銀総裁のW・D・ラクシマン、元財務長官S・R・アルティガラ、元大統領秘書官P・B・ジャヤスングラ、サマン・クマラシンハラも対象となっている。



〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- アジア経済研究所編『アジア動向年報（各年版）』アジア経済研究所。  
 荒井悦代 2003.「スリランカにおける二大政党制と暴力——1987～89人民解放戦線（JVP）反乱深刻化の背景」武内進一編『国家・暴力・政治——アジア・アフリカの紛争をめぐって』アジア経済研究所。  
 —— 2016.『内戦終結後のスリランカ政治——ラージャパクサからシリセーナへ』アジア経済研究所

〈外国語文献〉

- Abeyagoonasekera, Asanga 2023. *Teardrop Diplomacy: China's Sri Lanka Foray*. Bloomsbury India.  
 Bastians, Dharisha 2014. “36 Parties and Groups Come Together Under Slongan Ekwemu and Sign Memorandum at Viharamahadevi Theatre in Colombo.” DBSJYARAJ.com, 1 December.  
<https://dbsjeyaraj.com/dbsj/?p=35647> (2024年7月28日アクセス)  
 deSilva, K. M and Howard Wriggins 1994. *J. R. Jayewardene of Sri Lanka: A Political Biography: From 1956 to his retirement (1989)*. London: Leo Cooper  
 Gunatilleke, Godfrey, Neelan Tiruchelvam and Radhika Coomaraswamy 1983. “Violence and Development in Sri Lanka.” in *Ethical Dilemmas of Development in Asia*, edited by Godfrey Gunatilleke, Neelan Tiruchelvam and Radhika Coomaraswamy, Lexington, Mass.: Lexington Books,  
*The Hindu*. 2022. “Brief history of the rise, fall of Sri Lanka’s president Gotabaya Rajapaksa.” 14 July.  
<https://www.thehindu.com/news/international/brief-history-of-the-rise-fall-of-sri-lankas-president-gotabaya-rajakaksa/article65637015.ece> (2024年7月28日アクセス)  
 Keethaponcalan, S. I. 2022. *Electoral Politics in Sri Lanka: Presidential Elections, Manipulation and Democracy*. London and New York: Routledge.  
 Padmakumara, Muthu 2010. *Mabinda*. Nugegoda: Sarasavi Publishers.  
 Kusal, Perera 2017. *Rajakaksa the Sinhala Selfie: A Personal Narrative in Political Categories*. Kusal Perera, Colombo: Neptune Publications.  
 Crowdsourced Database n.d. “Tracking Militarization in Sri Lanka under the Gotabaya Rajapaksa Regime.”  
<https://docs.google.com/spreadsheets/d/1j50Lzq6ZfkWjNj0SzU57X3ijQTz1ujXEwBrU5lrOT5c/edit?gid=0#gid=0> (2024年12月1日アクセス)  
*The Sunday Times*. 2007. “I was an obstacle to the road map of the Rajapaksa troika.” 18 February.  
<https://www.sundaytimes.lk/070218/News/110news.html> (2024年7月28日アクセス)  
 Ivan, Victor 2020. “President JR Jayewardene Created the Infamous System Which Enables MP’s of the Ruling Party to Enter Into Business Transactions With the Government and Plunder Public Property.” DBSJYARAJ.com, 26 July.  
<https://dbsjeyaraj.com/dbsj/?p=69646> (2024年7月28日アクセス)

©Etsuyo Arai 2025

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

